

論 説

ラテンアメリカの農業問題と地域類型

石 井 章

はじめに

- 第1節 住民の人種的構成からみた地域類型
- 第2節 土地所有・経営形態からみた地域類型
- 第3節 地域社会の性格からみた諸類型
- 第4節 地域類型と農業問題

はじめに

世界の他の地域と比べてラテンアメリカ諸国は一般に貧富の格差・社会経済的格差が甚だしいことで知られる。こうした格差を生み出した重要な要因のひとつに不均衡な土地所有構造があげられる。⁽¹⁾ラテンアメリカの土地所有に関して一般的に指摘されるのは、一方の極に大土地所有＝ラティフンディオ (latifundio) があり、その対極に多数の零細農＝ミニフンディオ (minifundio) が存在するという、いわゆるラティフンディオーミニフンディオの二重構造ないし両極構造である。一口にラティフンディオといってもその形態や内容は国や地域により、また時代によっても大きく異なる。それをどうとらえるかがラテンアメリカの土地問題・農業問題を考えるうえでのひとつの鍵となろう。ラテンアメリカの農業や農村社会を土地所有や農業経営の形態によりいくつかのタイプに分けて分析する試みがなされている。これについては第2節でみることにする。

ところでラテンアメリカにおいて土地所有の二重構造が形成されたのはヨー

ロッパ（スペイン、ポルトガル）人による植民地化以後のことである。それ以前の時代にはラテンアメリカ⁽²⁾は先住民の生活舞台であったが、先住民の文化程度や人口規模・密度は地域によって大きく異なり、定住農耕を営み国家の組織を有するものから狩猟採集段階のものまでさまざまであった。先住民の定住農耕社会が存在したのはラテンアメリカのうちの一部の地域である。植民地化以後にどのような土地所有制度や農業社会が形成されたかは、それぞれの地域における先住民の文化程度や生業形態、とくに定住農耕社会が存在したか否かによって大きく影響される。したがってラテンアメリカの農業の地域的な特徴を明らかにするには植民地化前後の先住民社会の状況および先住民と植民者との関係を考慮する必要がある。

かつて先住民の定住農耕が発達し人口稠密であったところは、現在も先住民が人口の多くを占めている。植民地期にヨーロッパ人と先住民の混血化が進んだ地域は、現在混血民＝メスティーソ（mestizo）が多数を占めている。この他にヨーロッパ系白人が多数を占める地域、アフリカ系黒人が多数を占める地域というように、現在のラテンアメリカを住民の人種的構成によっていくつかの地域類型に分類することができる。これについては第1節で扱う。このような住民の人種的構成による地域類型化の試みは、ラテンアメリカの社会や文化・農業活動の地域的な特徴を理解するための重要な指針のひとつとなろう。

ラテンアメリカの農業問題を考察する際に、地域社会単位で農村をとらえ、それをいくつかの類型に分類する試みも重要な視点を提供するものである。第3節ではこれを扱う。

それではこのようにいくつかの異なった観点からみた諸類型をつき合わせてみたとき、全体としてラテンアメリカをいかなる地域類型に分類することができるのだろうか。そしてこれらの類型化はラテンアメリカの農業問題を理解するうえでいかなる有効性をもつか。第4節では農地改革と関連させつつこの問題を考察する。

第1節 住民の人種的構成からみた地域類型⁽³⁾

南北アメリカ大陸の先住民（北米ではインディアン、ラテンアメリカではインディオと一般に呼ばれている）は約3万年から1万2,000年前にユーラシア大陸から渡ってきた人々の子孫であり、人種の大分類に従えばモンゴロイドに属することは定説となっている。[大貫編 1995: 216~233] 16世紀初頭にラテンアメリカはヨーロッパ人（人種の大分類ではコーカソイドに属する）によって征服・植民地化され、一部の地域では先住民とヨーロッパ人との間で混血化が進んだ。これとは別に19世紀以後に大量のヨーロッパ人が移民としてラテンアメリカに入植した。また他の地域では植民地時代に労働力としてアフリカから黒人（ニグロイドに属する）が連れてこられた。

このようにラテンアメリカの住民はモンゴロイド、コーカソイド、ニグロイドの3大人種およびそれらの間のさまざまな混血から成っているが、地域によって住民の人種的構成には偏りがある。ラテンアメリカを住民の人種的構成⁽⁴⁾によっていくつかの地域類型に分類する試みは主にアメリカの人類学者によってなされている。

アフリカ系黒人の要素をひとまず置いて先住民インディオ⁽⁵⁾とヨーロッパ人との関係についてみれば、ラテンアメリカを以下の3地域に大まかに分類することができる。すなわち、a. インディオが住民の多数を占めるインド・アメリカ (Indo-America)、b. 混血民メスティーソが主体であるメスティーソ・アメリカ (Mestizo-America)、c. ヨーロッパ系が支配的なユーロ・アメリカ (Euro-America) である。サーヴィスはこれらの3地域類型の形成の要因を、植民地時代初期の先住民インディオとヨーロッパ人植民者との関係に見出だしてその分析をしている。[SERVICE 1955]

サーヴィスによれば、上記の3地域類型は征服期における先住民文化の3種類の形態と対応しているという。インド・アメリカに対応するのは先スペイン期（植民地期以前）に先住民の文化が最も高度に発達したところで、メキシコ中部から中米にかけてのメソ・アメリカ (Meso-America) と、南米のエクアドル、ペルー、ボリビアの高地を中心とする中央アンデス (Central Andes) の2

地域からなる。⁽⁶⁾人口稠密で、住民は規模の大きな地域社会あるいは都市に住み、集約的な定住農耕に従事していた。統治機構は国家の段階にまで発達し、社会は政治・宗教の両面で高度に組織化されていた。

メスティーソ・アメリカに対応するのはインド・アメリカの周辺に広がる低地の森林地帯（パラグアイ、ブラジル内陸部、アルゼンチン西部、チリ中部、ペルーの低地、中米・ベネズエラ・コロンビアの一部に相当）で、焼畑農耕が行われていたところである。人口密度は低く、地域社会の規模は小さく、安定性に欠けていた。もちろん国家の組織は存在しない。

ユーロ・アメリカに対応するのはメスティーソ・アメリカのさらに外側の、インド・アメリカからみれば辺境に位置する地域（アルゼンチンの大部分、ウルグアイ、コスタリカ、メキシコ北部、アンティール諸島の大部分が含まれる）である。（第1図）このうちアルゼンチン、ウルグアイ、メキシコ北部では狩猟採集段階の先住民が非定住生活を送っており、拡大家族（extended family）⁽⁷⁾以上の永続的な社会組織は存在しなかった。

征服期におけるこのような状況に応じて、ヨーロッパ人植民者による先住民の扱い方、労働力としての利用のしかたも当然異なってくる。ヨーロッパ人が先住民を最もコントロールしやすかったのはaの地域であった。bやcの地域と比べた場合、aの地域の先住民文化と当時のスペイン本国の文化との間には共通性がみられる。両者とも大量の労働力を要する集約的な農耕に従事し、政治・宗教の面で階層に組織化されていた。これに比べてbやcの地域の先住民文化とスペイン文化との間の共通性はずっと少ない。したがって他の条件を捨象すれば、植民地支配者と非支配者との共通性が大きいほど両者の間の適合・調整は楽であり、被支配者にとって破壊的なものとはならない。その結果被支配者であるインディオは土着の文化や社会組織の少なくとも地方的な基盤を失うことなく存続しえた。他方スペイン人支配者はこの地に栄えていた先住民の国家組織は破壊したが、下部組織はそのまま利用してインディオ住民を間接的にコントロールすることができた。

これに対してbの地域では先住民の人口密度は低く、地域社会の規模は小さく国家の組織は存在せず、さらに住民は植民者の支配を逃れて奥地で自給生活



第 1 図 住民の人種的構成からみたラテンアメリカの地域類型

を送ることが可能であったために、植民者はインディオ住民を労働力として利用しにくかった。cの地域になるとさらに住民の移動性と自給性が高かったため、ここでは直接奴隷化する以外にインディオをコントロールする方法はなかった。

以上のような植民地時代初期における先住民インディオとヨーロッパ（スペイン）人との関係の相違が、それぞれの地域での文化変容⁽⁸⁾の質に影響を及ぼしたとサーヴィスは指摘する。aの地域では文化の接触は基本的に国家組織の段階で行なわれ、末端のインディオの個人や家族・地域社会に直接影響を与えることは少なかったので、文化変容の進み方は最も遅い。bの地域においては接触とコントロールはより直接的・人格的なものであり、急速な混血化＝メスティーソ化が進み、同時に文化変容・同化が進んだ。cの地域においてはインディオ住民はほとんど絶滅に近い状態に陥ったため、文化変容は問題とされない。

以上で住民の人種の構成からみたラテンアメリカの地域類型の形成要因を、植民地時代初期における先住民インディオとヨーロッパ人植民者との関係に求めるサーヴィスの論点をやや詳しく紹介した。ここで示したa, b, cの3地域類型は、ラテンアメリカの農業活動の地域的な特徴を理解するために有効な視点を提供するものである。サーヴィスが主にスペイン系ラテンアメリカを対象として論じたのに対して、ブラジルを主たるフィールドとするワグレイは別の地域類型を示した。[WAGLEY 1968 a: 29~37] ワグレイも住民の人種の構成や文化的要素に基づいて、ラテンアメリカをインド・アメリカ、アフロ・アメリカ (Afro-America)、イベロ・アメリカ (Ibero-America)の3地域類型に分類している。ワグレイのいうインド・アメリカはサーヴィスのインド・アメリカとメスティーソ・アメリカを合わせた地域にほぼ対応し、ワグレイのアフロ・アメリカとイベロ・アメリカはサーヴィスのユーロ・アメリカにほぼ対応している。

この他にも人種構不成ないし人種関係を基軸としてラテンアメリカを地域分類した試みとしてはビールズやジリンの論文があるが [BEALS 1955], [GILLIN 1957], ラテンアメリカの農業の地域的特質を検討するという本稿の課題との

関連では、当面サーヴィスとワグレイの類型を融合したかたちで次の4類型を提示すれば十分であろう。すなわち(1)インド・アメリカ、(2)メスティーソ・アメリカ、(3)ユーロ・アメリカ、(4)アフロ・アメリカである。⁽⁹⁾

第2節 土地所有・経営形態からみた地域類型⁽¹⁰⁾

農業は自然条件に最も大きな影響を受ける産業であり、当然のことながら地形、気候、緯度、高度等により地域的な差が大きい。それに加えて植民地や新たな開発地の場合、人がなにを求めてその土地に入植したかによって土地所有や農業経営形態も異なってくる。

メキシコの農業経済学者フローレスは現在の農業構造を分析する際に、16世紀のヨーロッパ人入植の時期にまで遡って、南北アメリカを「農業植民地」(colonias agrícolas)と収奪植民地(colonias de explotación)の2大地域に分類している。[FLORES 1961: 267~299]前者は主として自営農業を行う目的でヨーロッパ人が入植した地域で、北米、南米の南部および中米のコスタリカがこれに含まれる。住民の人種の構成からみた地域類型に従えばユーロ・アメリカに相当する地域である。後者は地下資源・地力・労働力の収奪によって富を得ることを目的として入植者が入ったところで、主にインド・アメリカ(地下資源・労働力の収奪)、アフロ・アメリカ(地力・労働力の収奪)に相当する。フローレスは収奪植民地を、プランテーション諸国(los países de plantación)とラティフンディオ諸国(los países de latifundio)という二つの亜地域類型に分類する。ラティフンディオはかつて先住民の定住農耕が栄えていた地域(インド・アメリカ)に発達したものであるという。ラティフンディオとプランテーションの他にラテンアメリカの土地制度のタイプとして、フローレスは先スペイン期の経済形態の痕跡を残すコムニダ・インディヘナ(comunidad indígena、先住民共同体)とメキシコ、ボリビア、キューバの農地改革の成果としてつくられた農業経営体をあげている。

木田はラテンアメリカの土地所有の典型的な形態として、ラティフンディオ(巨大土地所有)、ミニフンディオ(零細土地所有)、コムニダー(共同体的土

地所有)の3種類をあげている。[木田 1964: 59~84]

木田はラティフンディオを、「農業進化の地主的系列において発展段階を異にする二つの類型」すなわち半農奴制的な地主経営が行われているアシエンダ型ラティフンディオと、大規模な資本主義的経営が行われているプランテーション型ラティフンディオとに分ける。⁽¹¹⁾木田はラテンアメリカの土地所有形態の特質を歴史的発展過程のなかに位置づけて分析しており、木田の類型はフローレスの地域類型と観点が異なるが、結果として木田のいうアシエンダ型ラティフンディオはフローレスのラティフンディオに、プランテーション型ラティフンディオはフローレスのプランテーションにほぼ対応しているといえる。

コムニダー(共同体的土地所有)については、木田は同論文でこれを前近代的な農業共同体の直接の残存物(アンデス山地)と土地改革の意識的な産物(メキシコのエヒード)とに分けているが、後の論文ではこれらを「共同体的土地所有のなかにおける事実上の、ミニフンディオ」として、すべてミニフンディオのなかに入れていた。そしてミニフンディオは「共同体的ミニフンディオ」と「私的ミニフンディオ」から構成される、としている。[木田 1971: 234]

この他にもラテンアメリカ農業を土地所有・経営形態から諸類型に分類した試みはいくつかみられる。木田も引用しているキャロルは、ラティフンディオ(アシエンダ型およびプランテーション型)、ミニフンディオ、コムニダの3類型をあげている。[CARROLL 1961: 161~170] バラクローとフローレスは、アシエンダ・ミニフンディオ複合、プランテーション、純粹ミニフンディオ(アシエンダ・ミニフンディオ複合に含まれない自給自足生産単位)、コムニダ・インディヘナ等いくつかの類型をあげている。[BARRACLOUGH & FLORES 1965: 62~64]

以上の諸論は、ラテンアメリカの農業に特徴的な大土地所有をアシエンダ型ラティフンディオ(ないしラティフンディオ)とプランテーション型ラティフンディオ(ないしプランテーション)の2大類型に区分する点で一致している。前者はアシエンダの他、エスタンシア(estancia)、フンド(fundo)、フィンカ(finca)、ファゼンダ(fazenda)等国や地域によって異なる名称で呼ばれているが、これをアシエンダの名で代表させ、後者をプランテーションの名で

呼び、それぞれの特徴を理念型として示せば次のようになる。

アシエンダは、植民地化以前から先住民インディオの定住農耕が発達していた地域（一般的に高地）に形成されたものである。それは土着の土地保有組織に代って、植民地支配者であるヨーロッパ人が土地の支配を通じてインディオの住民を支配するための政治・経済・社会・軍事上の組織であった。アシエンダの所有主＝アセダード（hacendado）は通常不在地主であり、管理はアドミニストラドル（administrador, 管理人）にまかされる。アドミニストラドルのもとに複数のマヨルドーモ（mayordomo）と呼ばれる現場監督がいて直接農民の監督にあたる。アシエンダの農民はペオン（peón）⁽¹²⁾と呼ばれ、代々アシエンダの土地に拘束されそこで働くことを余儀なくされている。すなわちペオンは、アシエンダの領域内に自給作物の栽培と居住のための小地片を貸与され、その代償としてアシエンダに労働力を提供する義務を負うのである。ペオンの生活圏はほぼアシエンダの領域内に限定され、労働力の移動はほとんどなく、社会は閉鎖的である。アセダード・アドミニストラドル・マヨルドーモ・ペオン間の関係は身分階層的な関係であると同時に、白人・メスティーソ・インディオという人種関係と結びつくことが多い。

アシエンダにおける生産活動は、アシエンダ直営の農・牧場で営まれる商品生産とペオンの小地片における自給食糧の生産に分かれる。前者はプランテーションの場合のような国際市場向けではなく、国内市場向けの穀物や畜産物の生産である。土地利用は粗放的で、十分な資本投下はなされず、生産性は低い。アセダードにとってアシエンダとは、利潤追及の場であるよりも、政治的・社会的権威の維持に役立たせるという、ステータス・シンボルとしての意味が大きい。このようなアシエンダが16世紀末から17世紀初頭にかけて形成された。

プランテーションは中米・カリブ海域・南米の海岸地帯の一部などの熱帯農業地域にみられる。サトウキビ・綿花・バナナ等輸出向けの単一商品の生産に特化し、海外市場への依存度が高い。高度の技術と集約的な土地利用により生産性が高いこと、外国資本との結びつきの強いこともその特徴としてあげられる。プランテーションの農業労働者は、近代的な雇用関係のもとにある賃金労働者であり⁽¹³⁾、この点で前近代的な人格的拘束を伴うアシエンダのペオンと

対比される。プランテーションは19世紀以後にラテンアメリカ諸国が一次産品の輸出を経済の基本とするに伴い発展したものである。

ここに示したアシエンダ（アシエンダ型ラティフンディオ）、プランテーション（プランテーション型ラティフンディオ）はあくまで理想型であって、現実のラテンアメリカのラティフンディオが二つの型のいずれかに区分されるというものではない。また時代とともにその性格も変っていくものである。とくに19世紀後半以後、ラテンアメリカと国際経済との結びつきが深まるにつれて、従来アシエンダ型であったものが、国際市場向けの生産を中心とし、利潤追求を第一とするプランテーション型に近いものへ転化する例がみられる。その場合でも農業労働者が雇用契約に基づく賃金労働者であるか、あるいは人格的拘束を伴う隷農＝ペオンであるかが、プランテーション型とアシエンダ型を区分する一つの基準となろう。⁽¹⁴⁾

アシエンダ型ラティフンディオが発達したのは主にインド・アメリカの地域、プランテーション型ラティフンディオが発達したのはアフロ・アメリカの地域およびメスティーソ・アメリカの一部にそれぞれ対応するが、いずれの地域においてもラティフンディオとならんでミニフンディオ（零細農）が存在し、後者がラティフンディオにとって労働力供給源の役割を果たしている。前者の地域ではアシエンダのペオンとは別に、アシエンダ外に住む身分的には自由な零細農がいて補助収入を求めてアシエンダに賃労働者として雇用される。このようなアシエンダの被雇用労働者もペオンと呼ばれる。⁽¹⁵⁾ 後者の地域でも、プランテーションの常雇労働者とは別に、収穫期などの農繁期にのみ雇用される臨時雇いの農業労働者がおり、ミニフンディオがその供給源になっている。

前者の地域には私的土地所有（ラティフンディオ、ミニフンディオ）とならんで共同体的土地保有（communal holding）が存在する。共同体的土地保有には、植民地化以前の先住民社会の土着の土地保有形態の系譜をひくものと、現代の農地改革によって新たに導入されたものがある。前者はコムニダ・インディヘナであり、後者の代表がメキシコのエヒードである。

コムニダ・インディヘナは、先スペイン期の土地保有形態⁽¹⁶⁾を基礎に、スペインの村落形態も取り入れて植民地時代初期に形成されたものである。それ

はアシエンダの支配領域外の社会の基本単位であり、村落共同体といえるものである。⁽¹⁷⁾ コムニダ・インディヘナは土地の総有⁽¹⁸⁾を基本としている。土地は居住地域、耕地、牧草地、山林から成り、耕地はコムニダの構成員であるコムネーロ (comunero) の分割地に分割されて個別に耕作されるが、牧草地や山林は共用に供される。各コムネーロの分割耕地を一営農単位とみなせば、コムニダ・インディヘナは実質上ミニフンディオの範疇に入れられる。

コムニダ・インディヘナとアシエンダは数世紀にわたり共生関係にあったが、両者の利害が対立する場合には紛争が起っている。コムニダ・インディヘナが現存するのは、メキシコ中央部から南部にかけての山岳地、グアテマラ高地、中央アンデス（エクアドル、ペルー、ボリビア）の高地⁽¹⁹⁾等である。

農地改革によって導入された共同体的土地保有に関してはここでは立ち入らないが、メキシコのエヒードについてのみコメントを加えよう。ラティフンディオ・ミニフンディオ両極構造の弊害を打破すべく、私的土地所有に対抗するものとしてエヒードという新たな土地制度を打ち出したのが農地改革の政策意図であった。エヒードにはコムニダ・インディヘナあるいはカルプリ〔注(16)参照〕との直接的つながりは認められない。しかしながらエヒードを導入した背景には、これらの共同体的土地保有を前時代の残存物として排除するのではなく、そこになんらかの積極的な意味を見出だして現代の要請に適合したかたちでこれを生かそうという思想が読み取れる。

第3節 地域社会の性格からみた諸類型⁽²⁰⁾

ラテンアメリカの農業問題を考察する際に、地域社会 (community) の性格によりこれをいくつかのタイプに分類する試みも重要な視座を提供するものである。

ラテンアメリカの地域社会研究として古典的な地位を占めるものに、レドフィールドのユカタンの民俗文化の研究がある。[REDFIELD 1941] 彼は「民俗社会」(folk society)、都市社会 (urban society) という両極概念を設定し、メキシコのユカタン半島の4つの地域社会を「民俗ー都市連続体」(folk-urban

continuum) の中に位置づけた。

ワグレイとハリスはラテンアメリカ全体をいくつかの亜文化型 (subculture types) に分類する試みを行なっている。[WAGLEY & HARRIS 1955] 彼らはレドフィールドのユカタンの地域研究に言及し、次のようにいう。従来の研究は地域社会をひとつの完結した単位として扱っているが、その内部にはけっして同質ではなく社会の分化に基づく文化の差異をもっている。したがって地域社会の枠組を越えた「亜文化」(subculture) による分類が必要である。彼らはラテンアメリカがひとつの文化伝統 (cultural tradition) をもつものとして、その下位概念を「亜文化」と名づける。そして亜文化の内容が国や自然環境、歴史、その地方特有の伝統によって異なるのでそれらを「型」(types) とする。彼らは以下の9つの亜文化型をあげている。(1)部族インディオ型 (Tribal Indian Types), (2)近代インディオ型 (Modern Indian Types), (3)農民型 (Peasant Types), (4)エンジェーニョ農場型 (Engenho Plantation Types), (5)ウジーナ農場型 (Usina Plantation Types), (6)町型 (Town Types), (7)大都市の上層 (Metropolitan Upper Class) (8)大都市の中間層 (Metropolitan Middle Class), (9)都市プロレタリアート (Urban Proletariat)。

ワグレイらはレドフィールドのユカタンの4地域社会を、上記の亜文化型に対応させる。州都メリダ (Mérida) は(7), (8), (9)の3つの亜文化型を含み、鉄道沿線の町ズィタス (Dzitas) は(6)町型と(3)農民型の2つの亜文化型を含むとする。農民の村落チャンコム (Chan Kom)は(3)、部族村落トゥシーク (Tusik) は(2)の亜文化型にそれぞれ対応する。ワグレイらはブラジルのサトウキビ栽培農場・製糖場を念頭において(4)エンジェーニョ農場型、(5)ウジーナ農場型という亜文化型をあげているが、スペイン系諸国を念頭においたならば当然「アシエンダ型」という亜文化型を設定したであろう。第2節で述べたアシエンダ型ラティフンディオ、プランテーション型ラティフンディオはここでいう(4)および(5)の亜文化型にそれぞれ相当するものとみられる。

ウルフは、世界的な規模での資本主義の発達、産業革命の進展および市場の拡大が農民層 (peasantry) に与える影響を考慮に入れて、この層の分析を行なっている。[WOLF 1955] ウルフによれば、農民 (peasant) とは「みずか

ら土地をコントロールし、生計の手段として農業を営む者」である。したがって自作農、小作農の他、コムニダ・インディヘナやエヒードの農民はこれに含まれるが、アシエンダのペオンやプランテーションの農業労働者は含まれない。また農場経営者 (farmer) も除外される。彼は農民を primitive と区別して、なんらかの意味で都市と関連しつつそれとともに全体社会 (socio-cultural whole) を構成する部分社会 (part society) とみて、それが全体社会に組織されるしかたを分析する。

彼はラテンアメリカの農民層の代表的な二つの型として、核アメリカ (Nuclear America, メソ・アメリカと中央アンデス) の高地で主として自給自足の生計を営む集約農耕民と、より高度の低い湿潤な高原および熱帯低地で生産物の過半を商品として市場へ出す農民をあげ、両者を対比しつつ分析する。

前者の地域は豊富な労働力と鉱物資源を擁してスペイン植民地の中心をなしたところであり、農民の植民地体制への編入は地域社会構造 (community structure) を通じて行われた。ここの地域社会の特徴を彼は「共体的」(corporate) と規定する。土地は地域社会によって総有され、土地の私的処分に対する共同体規制が存在する。地域社会内部の統治に関しては政治と宗教との組織的な結びつきが強く、政治・宗教階梯 (politico-religious hierarchy)⁽²¹⁾ が存在する。社会関係においては個人を伝統的な慣習に従わせ、外部からの革新的な影響を排除し、内部での階級分化を妨げて社会を常に均衡の状態におくという自己保存的な性格が強い。商品経済との結びつきは地方の市場を通じて行なわれ、そこで取引されるものの多くは家族労働の生産物である。

これに対して後者の地域は熱帯低地のサトウキビ生産地、コロンビア・エクアドル・ベネズエラの海岸のカカオ、バナナの生産地を含むが、最も典型的なのが高度の低い湿潤な高原のコーヒー生産地である。コロンビア・グアテマラ・コスタリカ・西インド諸島の一部等がこれに相当する。その地域社会をウルフは「開かれた地域社会」(open community) と名づける。「共体的」地域社会にはひとつの亜文化 peasantry が存在するのに対して、開かれた地域社会は peasantry が主体であるが、その他のいくつかの亜文化の担い手も存在する。前者が、その地域社会の統合を脅かすような外部からの影響に対して抵抗を示

すの対して、後者は外部の世界と常に相互作用を有し、外部からの影響の浸透を容認する。歴史的にみれば、開かれた地域社会は欧米の資本主義の発達による商品作物の需要増加に伴い出現したものであり、その運命は外部の需要、市場価格の変動と結びついている。

ウルフは前者を生計のための生産、後者を市場のための生産として両者を発展段階の差ととらえる見方はとらない。むしろひとつの地域社会において2種類の生産様式は外部の市場の条件に応じて交替しうるものとしている。彼は以上の2種類の他に、生産量の90パーセント以上を市場向けに生産する農民他いくつものタイプを提示しているが、提示にとどまり分析は行っていない。

ウルフの分析は、広義の農業就業者のなかから農場の経営者、アシエンダのペオン、プランテーションの農業労働者等を除外し、純粋な自営農民（土地所有形態からみれば数種類に分かれる）に対象を限定している。したがってラテンアメリカの農業部門のうちの一部をカバーしているに過ぎないが、地域社会に視点を据えてそれを経済・社会・文化的性格により類型化する試みは、ラテンアメリカの農民層・農村社会を考察するうえで示唆に富むものである。

ワグレイも、ウルフの定義に従って農民を「みずから土地をコントロールし、生計の手段として農業を営む者」としたうえで、ラテンアメリカの農民を「インディオ農民」(Indian peasant)と「メスティーソ農民」(Mestizo peasant)の2つに分類し、それぞれを代表する地域社会の分析を通じて農民社会の変化を論じている。[WAGLEY 1964] インディオ農民は亜文化の分類でいえば「近代インディオ型」に、メスティーソ農民は「農民型」にそれぞれ相当する。ワグレイによればインディオ農民は閉鎖的・共体的・同質的な地域社会を構成しているのに対して、メスティーソ農民は共同体的結びつきが弱く、外部に対して開かれ、地域社会として他の階層の者と並存している。すなわちメスティーソ農民だけで同質的な地域社会を構成するものではない。前者がウルフの「共体的」地域社会に、後者が開かれた地域社会にほぼ相当することは明らかである。

ワグレイは前者の例としてグアテマラ北西部のインディオの村サンティアゴ・チマルテナンゴ、後者の例としてブラジルのアマゾン下流域にある町イタ（仮

名)をあげる。彼によればインディオ農民の地域社会においては一部の農民がプランテーションの労働者となったり、あるいは都市の下層民化する一方、よそ者が土地を獲得して地域社会内に入り、地域社会の同質性は失われていく傾向がみられる。この過程はインディオのメスティーソ化を意味し、終局的にはラテンアメリカの農民にインディオ、メスティーソといった区分はなくなるであろう、という。

ここで注意しなければならないのは、ワグレイが「インディオ農民」、「メスティーソ農民」というときの「インディオ」、「メスティーソ」は第1節の注(4)で述べたような社会的概念であって、形質人類学上の人種区分ではないことである。ワグレイはある特徴をもった農民の地域社会(ウルフのいう「共体的」地域社会)をインディオ農民(の地域社会)と名づけ、別の特徴をもった地域社会(ウルフのいう開かれた地域社会)をメスティーソ農民(の地域社会)と名づけたに過ぎない。また前者の地域社会の特徴が後者に近づくということはインディオ農民の地域社会の変容を意味するものであるが、それは必ずしもある特定のエスニック集団に属するインディオのアイデンティティーや文化が失われることを意味しない。

第4節 地域類型と農業問題

第1節から第3節まででわれわれは住民の人種の構成からみたラテンアメリカの地域類型、土地所有・農業経営形態からみた地域類型、地域社会の性格からみた諸類型を概観した。それではこうした諸類型が今日のラテンアメリカの農業問題を理解するうえでいかなる意味をもつのか。本節ではとくに農地改革との関わりでこの問題を考察する。その前にⅠ～Ⅲ節で扱った異なる観点からの諸類型が相互にどのように関連しているか整理しておきたい。

農業問題と直接関わる土地所有・農業経営形態からみた地域類型を中心にみれば、ラテンアメリカを以下の3大地域に区分することができる。

A. アシエンダ型ラティフンディオが発達した地域。これは植民地期以前に先住民インディオの高度の文明が発達し、集約的な定住農耕が存在したとこ

ろである。フローレスの分類に従えば収奪植民地に相当し、植民地化以後に地下資源と労働力の収奪が行われた。土地所有形態としてはアシエンダ型ラティフンディオとミニフンディオ、共同体的土地保有（コムニダ・インディヘナ）が並存する。コムニダ・インディヘナは実質的にはミニフンディオに等しい。住民の人種的構成からみた区分でいえばインド・アメリカがこれに相当するが、メスティーソ・アメリカの一部もここに入る。地域社会の性格からみた類型でいえば、ウルフの「共体的」地域社会、ワグレイのインディオ農民の地域社会はこの地域にみられ、コムニダ・インディヘナがそれに相当する。しかしながら今日ではコムニダ・インディヘナのかなりの部分がウルフ、ワグレイの第2の類型である開かれた地域社会、メスティーソ農民の地域社会的なものに変化してきている

B. プランテーション型ラティフンディオが発達した地域。カリブ海域、中米の一部、南米の北部の海岸地帯で、熱帯低地あるいは高度の低い高原がこれにあたる。フローレスの分類に従えば収奪植民地で、労働力と地力の収奪が行われた。ここでもプランテーション型ラティフンディオとミニフンディオが並存する。住民の人種的構成からみた区分ではアフロ・アメリカに相当するが、メスティーソ・アメリカの一部も含まれる。地域社会の性格からみた類型では、ウルフとワグレイの第2の類型にあてはまるものが多い。

C. 以上のA、Bの2地域の他に第3の地域として、植民地化以前に先住民の文明程度が最も低く人口も稀薄であった地域があげられる。ここでは主に自営農民としてヨーロッパ人が入植した。南米南部の温帯地域と中米のコスタリカがこれにあたる。フローレスの分類による農業植民地、住民の人種的構成からみた区分ではユーロ・アメリカに相当する。現在この地域にも大規模な農・牧場が存在するが、それはアシエンダ型、プランテーション型のいずれとも異なり、多少とも自営農民的な性格をもった企業的な農・牧場といえる。これらの農・牧場はミニフンディオの搾取によって経営が成り立っているものではない。第3の地域を、自営農民型・企業的農業（牧畜）経営が発達した地域、とすることができる。

以上に述べたことをまとめて表にしたのが第1表である。

第1表 ラテンアメリカ農業の3大地域区分

	A	B	C
土地所有（農業経営）形態	アシエンダ型大土地所有 ミニフンディオ 共同体的土地保有 （コムニダ・イン ディヘナ）	プランテーション型 大土地所有 ミニフンディオ	自営農民的農業（牧 畜）経営
所 在	メソ・アメリカ 中央アンデスの高地	カリブ海域 中米の一部 南米北部の海岸地域	南米南部の温帯地域 中米のコスタリカ
住民の人種的構成	インド・アメリカ メスティーソ・ア メリカの一部	アフロ・アメリカ メスティーソ・ア メリカの一部	ユーロ・アメリカ
植民の形態	収奪植民地 （地下資源・労働力 の収奪）	収奪植民地 （地力、労働力の収 奪）	農業植民地
地域社会の性格	「共体的」地域社会 インディオ農民（の 地域社会）	開かれた地域社会 メスティーソ農民 （の地域社会）	

それではこのような地域類型化の試みが今日のラテンアメリカの農業問題を理解するうえでいかなる有効性をもつのか。そのことを筆者の当面の関心事である農地改革との関わりで考察して本稿の締めくくりとしたい。

ラテンアメリカの農業に関しては土地所有の両極構造とそれに伴う弊害が繰り返して指摘されてきた。これを是正するために農地改革の必要性が叫ばれ、いくつかの国で農地改革が具体的な政策プログラムとして登場した。それらの中には「農地改革」の名は冠せられていても、その中身は国・公有地の農民への払い下げであったり、未開拓地の開拓・入植であったりして必ずしも既存の土地所有構造の変更を伴わないものも少なくない。ここでは土地の強制収用、農民への再分配といった土地所有関係の変更を伴うもののみを農地改革として扱う。1910年に始まるメキシコ革命後の農地改革、1959年のキューバ革命後の社会主義政権下での農地改革、ベラスコ軍事政権（1968～75年）下のペルーで実施された農地改革、サンディニスタ革命政権（1979～90年）下のニカラグアの

農地改革はいずれもこの範疇に入るものである。

このようにラテンアメリカで農地改革が実施されたのは、多くの場合革命政権や軍事政権といった強力な政権のリーダーシップと政治的意思のもとであったが、その場合も前段階として農地改革を求める農民運動が高揚して騒乱状態がもたらされたようなケースが多い。

A, B, Cの3地域類型との関連でこれをみれば、農民運動が高揚してその結果農地改革が実施されたのはAまたはBの地域であり、Cの地域ではない。Cの地域にも大規模経営の農・牧場は存在するがそれが必ずしもミニフンディオの搾取を伴わないので、農民の側から農地改革を求める動きは出てこない。これに対してAおよびBの地域では、アシエンダ型にせよ、プランテーション型にせよラティフンディオとミニフンディオとの間に緊張関係がみられる。とくにラティフンディオが経営規模を拡大するに際してミニフンディオの土地を蚕食し、零細農民の貧窮化が進んだところで土地をめぐる紛争が生じている。Aの地域における共同体的土地保有（コムニダ・インディヘナ）はミニフンディオに含めて考えられる。

AとBの地域では農地改革を求める農民運動・闘争の形態が異なっている。Bの地域すなわちプランテーション型ラティフンディオが支配的なところでは、通常プランテーションの賃労働者が労働組合を組織して賃上げや労働条件の改善などを求める経済闘争のかたちをとる。それに対してAの地域では、アシエンダのペオンが団結してアシエンダに対して要求を突きつけるというケースはまれで、農民運動はコムニダ・インディヘナの側から出てくる場合が多い。

コムニダ・インディヘナとアシエンダは数世紀にわたり共生関係にあったが、19世紀後半以後ラテンアメリカの経済が農畜産物の輸出を基本とする一次産品輸出経済期に入ると、旧来の伝統的なアシエンダの一部は、輸出産品の生産と経済的利潤追及を第一義とするプランテーション的なものへと質的転換を遂げる。これらのアシエンダは経営規模の拡大を目指して、近隣のコムニダ・インディヘナの土地を蚕食する。この地域で農地改革を要求する下からの動きは、土地を失って貧窮化したコムニダ・インディヘナの農民の側からのアシエンダに対する土地奪還運動というかたちで起こっている。これらの運動は経済闘争

というよりも制度的変革を求めるものである。したがって政治的、社会的インパクトが大きく、地主の側の抵抗も強く、運動はより激烈なものとなる。

また A の地域では農民運動は民族問題と結びつくことが多い。コムニダ・インディヘナの農民をはじめ、アシエンダのペオンやその他の土地なし農民はインディオである場合が多く、アシエンダの地主（アセングード）をはじめとする支配階層は白人やメステイソであるというように社会階層と人種構成が結びついているからである。

メキシコ革命の原動力となった農民運動、なかでもメキシコ市南隣のモレロス州のサパタ（E. Zapata）に率いられた農民運動は、コムニダ・インディヘナの土地奪還運動であると同時にインディオの復権運動という性格も有していた。1960年代前半のペルーのシエラ（アンデス高地）における農民運動も、とくに南部シエラの場合に民族問題と結びついた様相を呈している。〔石井 1979: 18～21〕近くは94年のメキシコ南部チアパス州で起きたサパティスタ民族解放軍（EZLN）の武装蜂起も土地問題と民族問題が絡んでいる。さらにグアテマラの農村部における長年の紛争は民族問題と不可分である。

B の地域においても、労働者・農民の側の要求がたんなる経済的要求にとどまらず、プランテーションを解体して彼らに分配せよという要求になるときは、運動は当然激烈なものとなる。現実にプランテーションの解体を伴うような農地改革が実施されたのは、革命政権など強力な政権の明確な意思に基づいた場合のみであった。

ラテンアメリカで土地の再分配を伴う農地改革が実施された事例をみると、メキシコの場合農地改革の第1期（1915～34）には概して A の地域が対象とされた。B の地域のプランテーションが改革の対象となるのは第2期のカルデナス（L. Cárdenas）政権期（1935～40年）まで待たねばならなかった。〔石井 1983: 13～18〕ペルーのベラスコ軍事政権下の農地改革の場合は、シエラのアシエンダの解体とコスタ（太平洋岸低地）のプランテーションの接収が同時並行的に行なわれた。前者は A、後者は B の地域にそれぞれ対応する。キューバの農地改革で砂糖生産プランテーションを接収して国営農場に転換した例、ニカラグアの農地改革で旧独裁者ソモサー族の農場を接収した後に国営農場を

導入した例はいずれも B の地域における農地改革の典型である。

いずれにせよラテンアメリカで土地所有関係の変更を伴うような農地改革が実施されたのは A または B の地域であって、C の地域ではないことに注目すべきである。

注

- (1) 世界各国の土地所有の分布状況をジニ係数で示した場合、係数（不均衡度）の高い上位4カ国はラテンアメリカの国であり、係数0.6以上の上位17カ国中11カ国をラテンアメリカが占めている。[THIESENHUSEN 1995:9]
- (2) 植民地化以前の時代について述べる場合に「ラテンアメリカ」の呼称は不適切であり、「中南米」か「南北アメリカ」としななければならないところだが、ここでは「現在ラテンアメリカと呼ばれている地域」という意味でこの言葉を用いた。以下本稿ではすべて「ラテンアメリカ」の呼称で統一する。
- (3) かつて筆者は同様の問題を別のところで論じた。[石井 1964, 1974] 本節はそれらと一部重複する部分もあるが、新たに書き改めたものである。
- (4) 本来「人種」とは生物学的特徴に基づいて人類を分類する、形質人類学上の概念であって、文化や社会とは直接関係ないものである。しかしながら実際には人種という言葉は社会的な意味が付与されて社会的概念として使用される場合が多い。[寺田 1967: 1~8], [香原 1988] 本稿で「モンゴロイド、コーカソイド、ネグロイドの3大人種」という場合は前者の概念であるが、「ラテンアメリカを住民の人種の構成によって……分類する」という場合の「人種」には多分に社会的な含意がある。なおラテンアメリカを含む南北アメリカの「人種」概念が社会的な意味を含むことについては、ワグレイの論文 [WAGLEY 1968 b] が参考になる。
- (5) 「インディオ」という言葉は差別語であるとして、最近では価値中立的な「インディヘナ」の語に言い換える傾向があるが、本稿では引用文献の関係もあり、旧来の「インディオ」の語を用いる。
- (6) この2地域を合わせて「核アメリカ」(Nuclear America) と呼ぶ呼称もある。
- (7) 一組の夫婦とその未婚の子供たちからなる基本家族(核家族)が拡大したもの。二つ(以上)の基本家族が既婚子を要として世代的に結合した直系家族や、夫婦・複数の既婚子と彼らの配偶者および子どもからなる複合家族が含まれる。[新社会学辞典 1993: 163, 190]
- (8) 異なった文化伝統をもつ複数の社会(人間集団)が出会うことで相互に影響しあう際にみられる変化の過程 acculturation [文化人類学事典 1987: 674]
- (9) この4類型の他に「アジア・アメリカ」というもう一つの類型を加える論者も

- ある。国本はインド人・インドネシア人・中国人の多いスリナムとガイアナをアジア・アメリカとしている。[国本 1995: 71~76]
- (10) かつて筆者は同様の問題を別のところで論じたが [石井 1974]、本節はそれを全面的に書き改めたものである。
- (11) 木田は、アシエンダ型ラティフンディオは植民地時代のエンコミエンダ (encomienda) あるいはセズマリア (sesmaria) 「に由来する封建的大土地所有が、商品生産の発展に対応して『上から』再編・強化された……過渡的な土地所有形態であり、領主経営の直接的な転化形態である。」[木田 1964: 61] とし、プランテーション型ラティフンディオは「アシエンダにおける半農奴制的な雇役借地および分益小作を徐々に純粋な賃労働におきかえながら、近代的・ブルジョアの経営に脱皮した地主経営の完成形態」[木田 1964: 66] であるとする。
- (12) 国や地域により、コロノ (colono), ヤナコン (yanacón), ウアシプンゴ (huasipungo), インキリーノ (inquilino) 等異なった呼称があるが、ここではペオンをもって代表させる。
- (13) 初期には奴隷の労働力に依存していたケースが多いが、ここでは奴隷制廃止以後の状態について述べる。
- (14) ラテンアメリカの農業問題を扱う際に注意しなければならないのは、ひとつの言葉が、時代や場所が異なれば違った意味で用いられる場合が多いことである。たとえば農地改革でアシエンダが廃止されたはずの国でも「アシエンダ」という言葉は普通に使われるが、それは必ずしもここで述べた「古典的な」意味でのアシエンダではなく、たんに「農場」というほどの意味である。また「ペオン」も普通に使われるが、それも「人格的拘束を伴う隷農」ではなく「農業賃労働者」(とくに日雇いの) の意味である。
- (15) 両者を区別するためにアシエンダ内のペオンを peón acasillado (定住ペオン)、アシエンダ外のペオンを peón alquilado (被雇用ペオン) と呼ぶ場合がある。
- (16) メキシコ中央部のアステカ王国の場合はカルプリ (calpulli)、中央アンデスのインカ帝国の場合はアイユ (ayllu) と呼ばれる。
- (17) 英語の文献では Indian free village などと記述される場合もある。
- (18) 「総有」とは共同所有の一形態であって、「共同体とそれを構成する団員とが総有団体をなし、管理・処分の権能は共同体自体に、使用と収益の権能は各団員に帰属する。」[新法律学辞典 1991: 679]
- (19) ベルーではベラスコ政権下の1969年に、コムニダ・インディヘナはコムニダ・カンペシーナ (comunidad campesina, 農民共同体) と改称された。
- (20) かつて筆者は同様の問題を別のところで論じた。[石井 1974] 本節はそれと重複する部分もあるが、新たに書き改めたものである。
- (21) ラテンアメリカの先住民の地域社会には、政治ないし行政上の役職と、教会を管理したり守護聖人の祭りを取り仕切る宗教上の役職とがそれぞれ複数存在し、

それらの役職は階層にランクづけられている。成人男子は低いランクの役職から始まって政治と宗教上の役職を交互に勤めながら役職の階梯を上がっていくことを期待される。この政治・宗教階梯を基本とする役職の制度はカルゴ・システム(cargo system)と名づけられ、とくにメソ・アメリカの先住民社会の中核的な社会組織とみなされてきた。吉田栄人はカルゴ・システムに関する従来の概念を批判的に検討している。[吉田 1995]

参考文献

- Barraclough, S. & E. Flores
 1965 Tipos de tenencia de la tierra in *Reformas agrarias en la América Latina* ed. O. Delgado
 México, D. F.: Fondo de Cultura Económica
- Beals, R. L.
 1955 Indian-Mestizo-White Relations in Spanish America in *Race Relations in World Perspective* ed. A. W. Lind
 Honolulu: University of Hawaii
- 文化人類学事典
 1987 弘文堂
- Carroll, T. F.
 1961 The Land Reform Issue in Latin America in *Latin American Issues: Essays and Comments* ed. A. O. Hirschman
 New York: The Twentieth Century Fund
- Flores, E.
 1961 *Tratado de economía agrícola*
 México, D. F.: Fondo de Cultura Económica
- Gillin, J. P.
 1957 Mestizo America in *Most of the World: the People of Africa, Latin America, and the East Today* ed. R. Linton
 New York: Columbia University Press
- 石井 章
 1964 「アメリカの人類学者によるラテン・アメリカの類型学的研究」
 『石田英一郎教授還暦記念論文集』 角川書店
 1974 「ラテンアメリカの農業構造における土着の部門」
 西川大二郎編『ラテンアメリカの農業構造』アジア経済調査研究双書 222
 アジア経済研究所

- 1979 「ペルーの農民運動と農地改革」『アジア経済』20(9): 2-21
- 1983 「メキシコの農地改革と農業構造——エヒードとネオ・ラティフンディオを中心に」石井章編『ラテンアメリカの土地制度と農業構造』研究双書 313
アジア経済研究所
- 木田和男
- 1964 「ラテン・アメリカにおける土地所有形態の特質」『関西大学商学論集』9(1): 59~84
- 1971 「土地所有構造と農民諸階層」
井沢実・大原美範・西向嘉昭編『ラテン・アメリカ』地域研究講座・現代の世界 8 ダイアモンド社
- 香原志勢
- 1988 「人間、この感性的なるもの——人種の問題——」川田順造・福井勝義編『民族とは何か』岩波書店
- 国本伊代
- 1995 「ラテンアメリカ——悠久の大地・情熱の人々——」総合法令
大貫良夫編
- 1995 『最初のアメリカ人』モンゴロイドの地球 [5] 東京大学出版会
- Redfield, R.
- 1941 *The Folk Culture of Yucatan*
Chicago: University of Chicago Press
- Service, E. R.
- 1955 *Indian-European Relations in Colonial Latin America*
American Anthropologist 57 (3): 411~425
- 新法律学辞典
- 1991 日本評論社
- 新社会学辞典
- 1993 有斐閣
- 寺田和夫
- 1967 『人種とは何か』岩波新書
- Thiesenhusen, W. C.
- 1995 *Broken Promises: Agrarian Reform and the Latin American Campesino*
Boulder & Oxford: Westview Press
- Wagley, C. & M. Harris
- 1955 *A Typology of Latin American Subcultures*
American Anthropologist 57 (3): 428~451

Wagley, C.

1964 Peasant in *Continuity and Change in Latin America* ed. J. J. Johnson Stanford: Stanford University Press

1968 a An Introduction to Latin American Culture in *The Latin American Tradition* Wagley

New York & London: Columbia University Press

1968 b The Concept of Social Race in the Americas in *The Latin American Tradition*

Wolf, E. R.

1955 Types of Latin American Peasantry — A Preliminary Discussion
American Anthropologist 57 (3): 452~471

吉田栄人

1995 「先住民社会の祭礼と政治」

小林致広編『メソアメリカ世界』世界思想社